

昭和二十六年八月十五日発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第二十九号)

目

横川法語と一枚起請文 (1)

常に背にある光
超世の悲願 花田正夫 (2)

ただいまの私 三瓶徳英 (6)

よきひとの仰かうふりて 榊原徳草 (9)

随想断片 清水清吉 (21)

次

慈

光

第三卷・第八號

まづ三惡道を離れて人間に生るること大きなよろこびなり。身は賤しくとも畜生におとらんや、家は貧しくとも餓鬼にまさるべし。心におもふことかなはずとも地獄の苦にくらぶべからず。世の住みうきはいとふたよりなり。このゆゑに人間に生れたることをよろこぶべし。

信心あさけれども本願ふかきゆゑに、たのめば往生す。念佛ものうけれども称ふれば定めて来迎にあづかる、功德莫大なるゆゑに本願にあふことを喜ぶべし。

また云く、妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念のほかに心はなきなり。「臨終のときまでは一向妄念の凡夫にてあるべきぞ」と心得て、念佛すれば来迎にあづかりて蓮台に乗する時こそ妄念をひるがへしてさとり的心とはなれ。妄念のうちより申し出したる念佛はにごりにしまぬ蓮の如くにて、決定往生うたがひあるべからず。

一枚起請文

源空聖人

もろこし我が朝に、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる觀念の念にもあらず。また学文をして念のころをさとりて申す念佛にもあらず。

ただ「往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して、うたがひなく往生するぞ」と思ひとりて申すほかには別の仔細候はず。但し三信・四修と申すことの候ふは、皆決定して「南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちにこもり候ふなり」。

この外に奥深きことを存せば二尊（釈迦、彌陀）のあはれみにはづれ、本願にもれ候ふべし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、智者の振裾をせずして、唯一向に念佛すべし。

常に背後にある光

花田正夫

一向專修の人においては、廻心といふことただ一度あるべし。その廻心とは日ごろ本願他力眞宗を知らざるひと、彌陀の智慧をたまはりて「日ごろの心にては往生かなふべからず」と思ひて、本の心をひきかへて本願をたのみまゐらすをこそ廻心とは申し候へ。

歎異抄十六章の大切な所である。眞宗信仰の眼目である。即ち廻心とは、彌陀佛の御智慧に照られて、日ごろの心では往生は出来ない^トと知らされて、本の^トころをひきかへて本願をたのみまゐらすことであると訓へられてゐる。

日ごろの心

扱て彌陀佛の御智慧に照らされた「日ごろのころ」とはどういふ心であらうか。もとより我々凡夫が常日頃おもひおもうてやまぬころである。

それでは我々は常日頃どう思つてゐるかといふと、我々の眼は前に向つて、手を延ばし、足を走らせて、色々な願ひを未來にかけて、前へ前へと進み求めてやまぬのである。

病氣すればはやくなほるやうに、貧乏すれば金が出来るや

うに、子が生れると立派に成人して呉れるやうに、自己の人格も完成して立派にやつて行けるやうに、等々有形無形の理想やら願ひを描いて、日夜に腐心して行く、ことに現代のやうに大戦争と敗戦によつて色々の障害が出来て、我等の願ひが満たされ難くなつて来ると、いよいよもつてそれを求める情が強く熾んになり、希望をかなへるためには手段をも選ばぬといふ風になつて行くのも一方無理からぬことである。然しここで大思一番せねばならぬことは、自分自身の欲求が無限であるといふことである。して見れば、病氣がなほりさへすればと願つてゐる者も、恢復すれば職を求め、職場を得るとさらに好條件を求めて行く。そこにはてしなく欲求の津浪に翻弄せられてホット一息つく暇もないことである。「無いものはないで苦しみ、ひとへにあることを願ひ、有るものは有るで更に多からんことと、失はざらんことを求めるもの、憂毒消ゆることなし」とは佛のかねて訓へ給ふところである。かといつて求めるなと云はれるのではないが、凡夫として前へ前へと求めに求めてやめ難く、日夜に身心をすりへらして行くが、そこは無限に続く茨の道で眞の解決は得られ

ぬことを訓へ給ふのである。

マツクアサー元帥は日本人は勤勉であるが十二歳だと議會で証言してゐる。敗戦後の日本は敗戦國民の持つ卑屈と、復興の難澁による苦悩にあえいでゐるが、かの所謂四十七歳の精神年齢に達してゐると称する欧米諸国においても血なまぐさい苦闘が無限に続けられてゐる。だから相對の人間界における賢愚とか善惡のへだてではない。洋の東西、時の古今なく、無限の欲求にひきずり廻されてゐる人間が眞の解決を得るなどは有り得ないことである。

昔ある国の囚人の重労働の一つとして「底のない槽に水を限りなく汲み込ませよ」といふ話があるが、これではどんなに汗を流しても無限に満つる時は来ない。限りある力しかない人間が無限の欲求が満たされるだらうと願つてゐるところに根本の錯覺がある。

かといつていい加減のところであきらめよと言はれたところが、それは欲求の無限性が許さない。

更に死といふ問題が据へてゐる。不老長寿の仙薬を求めたといふ秦の始皇帝ならずとも、長く生きたいと万人願つてやまぬところであるが、死は老少の別なく猛威をたくましくする。ただ吾々は自分勝手な願ひから、まだまだ大丈夫ときめて居るが、佛の御目には「風前の灯火」にひとしい生命として映つてゐる。そののがれられぬ死を前にして何の光があるのか。私は六高の試験準備の最中に、春二十歳の兄を失ひ、秋また二十八歳の姉を失つた。一年に二人の兄弟を失つた私は

の意趣にかへらしめられるのである。

佛は常に吾等の背後に立ち給ふ

佛はすでに吾等の「日ごろの心」をどんなにあえぎもとの発展せしめても、そこには永遠に光の絶えて無いことを自覺遊ばされて、遂に出世間の大道を証し給うたのである。

出世間とは「世間を出る」ことである。世間の一切に絶望しつくされて、世間をこえた世界、世間にまたけられぬ天地に住せられるのである。かくて世間を出られるが故に世間をよく知り給ひて、右往左往してうろづき廻り、自ら害し他を害してやまぬ我等を、悲心切々として我等が背後に立たれて、呼びに喚び、護りに護つて、無限にやみ給ふ時はない。

プラトリーの有名な洞窟の譬喩を思ひ出す。「洞窟の中に人が坐つてゐる。光は常に背後から射してゐるが、その人は堅く鉄鎖にしばられてうしろを振り返ることが出来ない。彼の目に見えるものは、光に照らされた自己の暗い影ばかりだ」といふ風なものであつたと記憶する。

光は常に我等の背後にあつて、その人を照らし続けてゐるが、振り返つてその光を見ることが出来ない、然しその光は我等の暗い影を写し出してくれるといふことが、今なほ私の心に刻まれてゐる。

母親が子に対して護り哺み育てる姿がこれに似てゐる。安波先生の随想録中の首が首のまままで救はれる実話に想到する。概要を申せば、宇和島市の人で眼を患ひ、一眼は完全に

「今懸命に勉強してゐるがそれは死を前にして皆崩れ去つてしまふではないか」と、底のない井戸に落される思ひに震へ上つたこともある。又岡山の医大の三年の時親友陶山君の死に遭ひ「自分は医師となつて病人をなほし且つは親兄弟の勞に酬いたいと願つてゐたが、自分が死ぬるとは知らなかつた。今となつて万事休す」と長歎息した同君の悲痛な叫びが二十四年後の今日なほ耳の底に残つてゐる。

「生も苦なり、死も亦苦なり」と佛はかねて訓へられてゐる。それなのに吾々が勝手に死なぬものと独りきめして、あれもこれもと前に手を伸ばし、足を棒にして、勿々茫茫として暮してゐるが、まことにほかない生のいとなみであると知らされる。

宗教哲學者で最近やかましく云はれてゐるキケルゴールの言葉に「残水の小魚が食を争ひ、居を競うてゐるが、右へ行くも、左へ行くも、上に浮ぶも下に沈むも行き詰りと突きあたりばかりで、すでに棲む世界が小さな溜り水で、ほどなく乾いてしまふといふことを小魚が自覺する時、水のつぎることのない大河に出たいと願ふ心が信を氷める心だ」といふ意味のことを述べてゐる。

「彌陀の智慧をたまはりて」、我等が「日ごろの心」の全体がそらごとたはごとであつた。消えて行き崩れて行き、未通るものは一つもないと、知らされるところに、この虚仮なる吾等の全体を、恰も地球の全体を空気が包みに包むが如き無限の慈悲を以つて、常に照らし護り哺んでやみ給はぬ本願

失明し、一眼はやつと明暗を分けるだけの視力でこれも亦遂に失はねばならぬといふ状態であつた。故郷の専門医もこれをどうすることも出来ないといふので、あちらこちらにお参りやらお籠りをして見たが駄目であつた。遂に福岡の医科大学に三月入院したが、これも一向にはかばかしくない。薬

の処方だけ頂いての帰途、別府の温泉に湯治に来たらヤイトで治るといふので、二月月通つたが思はしくない。そうした時に「安波医師に診て貰ひなさい、安波さんは治らぬものは治らぬと正直に教へて呉れる」と聞いて老母と患者が門を叩かれた。先生はねんごろに診察せられて老母に「大学の診断通りだから、何とかせよと言はれれば注射とすりこみ薬を用ひて見る外はない」と答へられた。教回先生のもとに治療に来た患者が「先生こうしてゐると眼はよくなるのですか」と聞くので「眼科の医者としては誠に残念なことながらこの病はよくなる外はないのだ」と答へられると、患者が如何にも悲痛な声で、「なまげない身体になつたものですか、もうよくなるのですか」と繰り返す言葉が安波先生の胸を打つた。そこで其晩再び来るやうにと云はれると母と患者が来た。そこで君は「よくなりたいたいよくなりたいた一杯であるから、大学でもつと入院して居たらとか、あれも徹底的にやらして呉れたらとお母さんに不平ばかり持つて居るであらうが、お母さんは初めから君の目のよくなりなことを知つてゐるが、どうかかしたいと願つてやまぬ君の心に同情して、アチラコ

チラと迷ひ歩いてゐるのだ。ここでよく聞いて貰ひたのは君の目は治らぬが、治らぬことを知り乍らも君と共に、さぞ苦しからう、さぞ淋しからうと何処までも君につき添うて下さり、心ひそかに失明後の君の將來までを案じて下さる親心があり難いではないか。治らぬものを治らぬと知りながら、治りたい一杯で苦悶してやまぬ君と、それを何処までも同情して捨て給はぬ親心には自分も泣かされるのだ」と浮々として佛の慈悲を話されると、患者は初めて自分の治らぬことを知り、この治らぬ自分を捨てずして遠い旅を共にして下さる親心に泣いた。母親はこの姿を見て、「目が治つたより嬉しい」と感泣したといふことがある。

親は常に子の背後にあつて迷ひ行く子に寄り添うて離れず、自分の生命の全体を注ぎに注いで下さるのである。子がそれと氣付くのはあととあり、一生氣付かないで終るかも知れないがそう言ふことにかかはらず常に子の背後に立つて照らしに照らし、護りに護つて下さるのである。

私自身に思ひ当ることは、私が高校の入学準備中であつた。家の離れで終日机にカチリ着いてゐた時、母は一月二月の極寒の夜中に、庭石依ひに音を忍ばせて私の勉強部屋に何度か近づき、私の起きてゐるか否かを障子の外でなしかめ、若しかうたた寝をして風邪を引かぬやうにと護りつづけて下さつた。当時をうしたことも知らなかつたが、試験を終へた時嫂からそれを聞いて、自分が入学出来たのも親の念力のお蔭であつたと知らされた。今なほ四月の入学時に新調の洋服で慶

び勇んでゐる学生を見るとその背後に護りに護り、念じに念じてやまぬ親の涙を感じる。

佛は常に我等の背後に立ち給うて、私共がそれと氣付く氣付かぬに關はらず、護り、照らし、御生命の全体を注ぎに注いでやみ給はぬのである。

世の中に私共の前に立つて導びく教がある。然しそれでは私は取りのこされる。常にうしろに立ち給うて、私が右に往けば右、左に往けば左に、「慈悲随逐して犢子の如き」大悲によつてのみ安きを得るのである。更に我等の前に立つ、即ち我等の「日ごろの心」を助成してくれる教は、我等の煩惱をしばしよろこばしてはくれやうが、結局それは亡びへの道標である。

我等の背後に常にあつて、照しに照し、護りに護つて下さる光、それは世に超え給ふ光である。世間を脱し給ふ故に世間にさまざまゆられず、かへつて世間の濁りを淨めに淨め、世間の闇を破りに破つて下さる。世を超え給ふ故に永遠である。世間を出で給ふ故に不滅である。世間を出で給ふ故に清淨である。

我等はこの出世間の光にふれて出世間の佛陀を拜し、世にあるまゝ世を超えさせて頂くのである。世を超えさせて頂く故に世に安んじつつかくして無量無辺の清淨無碍の光照をかうむりつつ、やがて清淨の佛国にかへらしめて下さるのである。溜り水の小魚が、そのままに涸渴を知らぬ大河に游泳せしめられる可思議がここに成就せられる。

れた光明ではない、もとより遠い昔から眞実があつて、その眞実にもとづいてよき人の仰もあらはれたのである。

更に眼を転ずれば一切の衆生の一人一人に佛はその光明の全分をつくして注ぎに注いでやみ給はぬのである。その故は濁りに濁り、汚れに汚れて、煩惱具足の我等が織り爲して行く世間に一点の光なきことを佛はよくし召すが故に、悲心また極りましまさぬのである。

ただいまの私

ただいまの私は一人暮しの古稀翁であります。知人は同情して「一人暮しではさぞ淋しからう、不自由であらう」と言つて下さるとき、私は「仰せの通りであります」と好意を謝します、けれども実は淋しい不自由な思ひのする時よりも、そうでない時の方が多様に感ずるのであります。

ただいまの私を言うて見ようと思ふ時、今日の思ひも、昨日の思ひも、一昨日のそれも皆同じ様な思ひが起るのが不思議な氣がするのであります。それは只今の私に幸福感とでも云ふ様な氣持が動いて、私は幸に只今健康であるといふことと、も一つは白毫の恩賜にはぐくまれて粗末ながらも衣食住

三 瓶 徳 英

に差支へぬといふ事などの爲、孤影寥々たる私が満足させられて居るのであります。それは恩寵思想だと云はれるかも知れませんが、只今の私には斯様に感ぜられるのであります。

此の健康な身体を頂いた親の御恩が有難く思はれて、親の恩一入うれし南無阿彌陀、

念佛する身をそだてたまひし

と歌のまねをしたこともあります。

又私は持病の神経痛がある爲に、発作の時は非常に痛み苦しむのであります。其の時の私は幸福感とは正反対に、何とした情ない事か、苦しい事かと苦惱と愚痴に覆はれて、世界

は眞黒闇の様な気がします。痛みが段々軽くなると、私の心の奥に声が聞えて「お前は痛い」と云うて苦しむのは誠に可哀想だが、お前の業報は、もつともつと苦しむべき深い重い業因があるのだ。それ位の事で済めば有難いことだぞ」と、何入かが私の心に言ひきかせて下さる気がするのであります。

一人暮しの心理は奇妙な変痴氣な事もあります。一人居ても話をするのであります。これが矢張り心の奥の淋しさでありませうか。たとへば夜中寢床の中で「明日は何をしようか」と考へます。「洗濯をしない」と一つの私が云ひます。すると他の私が出て来て「イヤ洗濯は二三日先でもよいから読みかけの本を読みなさい」。「ハイハイ、それでも雨が降り出すと又当分洗濯が出来なくなるではないか」、「ソレもそうだなあー」しかし、など頭の中で私なるものが二人も三人も出て来て問答往復するのであります。

今から三十年も前の事でありませけれど、私の寺の檀家で、谷口柳作と云ふ一人暮しの無我の信者の家で、日が暮ればてから、時々話し声が聞えるのを隣家の老爺が不審に思ひ、何人が時々行くか、今晩は見とどけてやらうと、ひそかに隣居へ近づき、よく聞けば、信者の老爺が一人で大きな声で佛様と話して居る事がわかり、爺を拜むで帰つたと私に聞かせてくれた事がありました。私の一人暮しは、佛様とは話せませぬけれども、私の心が二つに分れて、頭の中で話し合ふのであります。

持病の病苦も暫くすると痛みは止まり、平氣になり、吞氣

転迷開悟の道に入らせて頂くより外にたすかる道はありません。

思想濁乱、闇雲低迷の世相、その渦中にまきこまれたつゝある邦家の現状を如何にすべきか。徒らに逃避して再興日本の軌道を離るべき時ではない。日々新聞紙上に見る一部社会人の墮落悪化、醜狀慘狀の記事をも無関心に看過し難いではありませんか。

玄風劬学の眞宗大意と云ふ書の中に、

「されば悪人往生と教へて善男善女を成就し、善もほしからず、悪もおそれなしと説いて、識らず識らず諸悪莫作の心地を得、衆善奉行の実徹にかなはしむ、是れ開山大師、肉身の如來、妙教流通の大手段、仰いでもなほ仰ぐべきものなり。

されば在家出家、士農工商の本業のまゝにて、本願の不思議を信じつれば、煩惱即菩提にして、終日、衣食を営み、終日念佛す。生死即涅槃にして、終身生死の凡夫、終身生死の果を招かず、かゝる大益を得てその心安ければ、造次にも楽しみ顛沛にも楽しむ。喫茶、喫飯、語黙、作々、妙境ならざる事なし、仁者の山、智者の水もあにこれに外ならんや。斯る楽しみをよく心に存して、而も逝川の歎き、風樹の悲しみを忘れず、一息つがざれば千歳永く逝く。命終刹那にして依正滅亡し易ければ、努めて油断なく、称名念佛したまへかし」との御教誨があります。

聖徹太子は一人はなはだ悪き者すくなし、よく教ふればこ

になつて、又幸福感にひたるのであります。

あともどりあともどりして迎るかな、甲斐なきことに心まどいて、との近角先生御愛唱の御教を思ひ出させて頂きます。そして咽喉元すぐれば熱さを忘れて、何等の不安もなく、読書したり炊事したりして、日夜を過して行くのが、只今の私であります。

「自身は現に是れ、罪惡生死の凡夫」と仰せられた善導大師を親鸞聖人は非常に渴仰遊されて、その徳を讃へられました。大師は学問深く、信仰厚く、毎日毎夜、読経と念佛と勉強とに没頭せられ、三十年間法衣と袈裟を身から離されなかつた。ただお風呂とお便所の時だけおとりになつたとの事でありませう。その聖僧御自身が「現に罪惡生死の凡夫」とは餘りに誇張された言ひ方ではないかとひそかに思つた事もありましたが、矢張り大師の御眞意であることが伺はれます。

暗い処では塵埃も汚れも解らぬけれど、光に照らされると、光が強ければ強いだけ、僅かの塵も汚れもハツカリ解るのであります。大師のお心に、彌陀の慈悲の光が照り耀いて、八万四千の煩惱の汚点を御自覺なされた信仰の御告白が「罪惡生死の凡夫たる我は、唯彌陀佛の本願に救はるゝの外に道なし」との切々たる衷心の御さけびであらせられる。このお言葉は永遠に新しき、只今の御声であります。何時の時代でも、如何なる人でも、古今東西に涉り、この御声に導びかれて、

れにしたがふ」と仰せられ、よく教へ給ふ善き教、即ち佛の教化のみが、如何なる悪人も救はるゝ無碍の一道なることを示し給うたのであります。

願くば世の人々が、この道によつて眞実の自己にめぐみ、眞実の道を力強く歩んで頂きたいと願ふばかりであります。極惡深重の私でさへ、唯念佛に救はれて、何等の不安もなく落着いて、爲すべき事をなし、満足させて頂くのであります。「唯念佛 われにふさはしき千人力」と出鱈目に字をならべて見ました。これがただ今の私の姿であります。

南無阿彌陀佛

昭和二十六年五月二十九日

よき人の仰かうふりて

植原徳草

或る時であつた。それはもう十何年も前のことであつたが、私はよき人と云ふ言葉に生れて初めて遭つた。この「よき人」と云ふ実感が滲み込むやうに全身を襲うた。

念佛する身になつて教年、私を生捕りにしたこの言葉「よき人」は、その後忘れやう筈はないが、特に此頃になつて又新しく私をうるほはさせてくれるのである。然し今このよき人の実感をもう少し精しく云ふなら、その下に「仰かうふりて」と続けねばならない。此の言葉は歎異抄第二章の「親鸞におきてはただ念佛して彌陀に助けられまゐらすべし」と、よき人の仰かうふりて信する外に別の仔細なきなり」のうちにあるのだが、聖人は師匠法然上人の前に坐して、一器の水を一器に移すが如く、彌陀大悲の有りつたけを身にうつしとられたまゝを告白せられた世にも稀なる告命である。

世の中には数知れぬほどある。現在世界の国々の人口を数へ上げたならば、驚ろく数にのほるだらう。それから又今はすでに亡き数に入つた過去の人々をこれに加へたらば果てしもない無量無数の人があるわけだが、その人々の中に「よ

に生きてゐるよき人には遭へもしようが、もう過去に去つた人にどうして遭へるであらうか、と疑ふ人もあらうが、それはその人の仰の中に沈潜する時であるのである。仰の一部始終を聞き入る時にあへるのである。その中に身を置くときにあへるのである。だから私が身を以つて聞けるのである。

その仰は私に相応して寸分違はず間違ひのないまことの仰である。この仰を聞く者はその「仰をかうぶる」より外にないことに氣付く仕組が出来上つてゐるのがよき人である。

その教をかんてふくめるやうに私にあくことなく説いて止めまない、あくまで止めない人がよき人である。此の仰を被つて身を感じ心にとろけた者は、臨終一念の夕まで、その人が常に私から離れない。時には私の方が忘れかけてゐる時でも、その忘れかけてゐることにかまけず、忘れかけてゐるなりの私に金輪際離れて呉れないのである。常に私の中にあつて私に語り私と一つになつて、淳々と語り聞かせて呉れる。その仰を聞くことが、その人をいよいよ親しくさせ、好き人の感はそれによつて益々深く私に喰ひ入り、又このよき人の仰はいよいよ私に聞かされて来る。仰は人を私に生かせ、人は仰せをどこまでも私に語つて尽きない。かうしたよきひとの仰をかうぶることは、まことに私のあらゆる子想や夢の遙か彼方に於てのみ可能なことである。

思ふに、「人生百年、却て懐く千歳の憂」とは眞実に自己に沈潜した者の偽らざる感懐である。有るものは有ることによつてその失はれんことを憂ひ、無き者は無きことによつて

よき人が何人あるであらうか。よき人と云つても種々様々で、或は善い性質を生れ乍らに身につけてゐる人、行ひの上にて吾々の到底眞似の出来ない人、みめ形よき人、又は私に持つて来いの人、あゝなれたらいい、なあと羨望のまとなる人、都合のよい人など数へたならまだまだ沢山あるかも知れない。ただ、兩手を差けて恰度、小兒が母親のふところへ、「お母ちゃん」と走り寄つて行くやうなよきひととは三世に互つて、そんなに沢山ある筈はない。併もその少数のよき人達の中、特に私一人を目当てに、私に直々にあつてくれる人は稀に只一人あるだけである。

久遠の昔より永劫に互つて唯一人私を訪ねて巡りあふことを唯一の目的とし、さうして私の一切の罪禍を見ぬき見通して、絶対に同情してくれる人、そして又三世の旅を悲喜苦樂の何れとも一つとなつてくれて、遂にはその旅を速く遙かに踏み越えて、再び苦難など云ふ文字もない國に導びき入れてくれる人、かうした私にとつてたつた一人のなくてはならぬよき人、それが私の云はんとする「よき人」である。然し現

その無きことを憂ふ。有つても無くても、喜んで悲しんでも、どこを押しても窮極の所は人生百般、果てしなく、限りなき眞暗闇が最後の落ちである。さうして皆おそるべき永久の常闇に沈んで行くのが吾等のさだめである。

「親鸞におきては、唯念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし、とよき人の仰かうふりて信する外に別の仔細なきなり」これは聖人が師匠法然上人から聞きとられた眞髓であり、それはまた吾等に聖人が授けられる唯一の贈り物、無明長夜を破し去る極意である。

吾々の周囲には私のどこかに喰ひ入つて思ひ上らせる人がある。なだめる人がある。戒める人がある。どれもこれも場末の市場にならぶ道具のやうに。一時は目にとまつても通りすぎてしまへば心に残るものはない。人生一生涯は湯末の雑踏する市場の道で、左を眺め右を眺めて押されたり突き当られたり、あれがよいこれがよいと目にうつる物にしばし見とれてゐるうちに、いつしか生老病死の道は最後のどたん場に私をつれて来てしまふ。

私は今までに少くとも数人の立派な人々に、尊敬する人に、あゝいふ人になれたらと思ふ人に因縁が結ばれてゐたのであつた。然しどの人々も眞似することは出来ても、そくいふ人にはなれないで、ひとり長大息するのが落ちである。しかもその眞似さへも、いつの間にかやら続きはせず、元の木阿彌で

孤独に歎き、深い溜息をつくか、それをごまかすか、何れにせよ、とりつく島のない荒野に迷ひ出た心地に還る外ないのであつた。

然し「菩薩は時を知り給ふ」とか、やうやくその時期の熟するを待つて、否私の心の隅から隅まですつかり掃き清め、「よろづのこと皆もつてそらごとたはごとまことあることなき」を知らしめて、唯念佛のみがまことであると、たゞ一人私に教へて下さつたのはよき人、聖人の御念佛であつた。

よき人、親鸞聖人の仰せ「南無阿彌陀佛一つですよ」との慈言悲語は、往生淨土の一筋道である。三世を貫ぬき十方に普ねき大慈悲に照し出された念佛一つの道である。

私の皮肉骨髄から湧き出る悪臭毒氣の隅々まで見ぬき給うて、私もその通り汝とちよつとも変らないのだよ。さういふ私やあなたの爲にこそ彌陀佛はお出まし下さつたのですよと慈顔愛語を以つて今にして猶とき続けられ手をかざし膝を進め給ふよき人聖人がどうして忘れられやう。

もう一つ言葉を強めて云へば、思ひ出したり忘れたりするやうな水臭い人は「よき人」ではないのだ、思ひ出す以前に私になつて下され、忘れることさへも見て取つて下さる御方、つまり何処でも何時でも永劫から無終へかけて、ありとあらゆる私そのものになりきつて切々離れず、無上殊勝の国土へ案内して下さる御方こそよき人であり、その仰の一つ一つこそ、そのまゝ御念佛なのである。

此の世が淋しく、我身が冷いのは、よきひとに遭はないか

随想断片

さる方が何佛上人の短冊を或る人から貰はれて非常に喜ばれて居られたが、年始に見えた一人の方に、早速その短冊をお見せしたら、よくよくその短冊を見られて「オヤオヤこの短冊は本金散しです、私ならとても贈物にはしないんだが、」と云はれた。

いま一人の方がまた參られたので、お見せしたら、その方はよくよく見られて「ハハア、これは四円位の値折ちがありますね」と云はれたと、さる方のお話であつた。

ほんとうに不用意の間に出す言葉こそはまつたく眞実を語るものだ。纏めた話、考へた話には仲々眞実が見出されぬものだ。

昭 一二、二月

住みなれたところから引越せねばならぬ事になつた。居るべき処を探すべく毎日の様に市内をうろつき廻つた。仲々思ふ様な家が見つからぬ。間取りや家賃や明りの具合が折り合はぬ。足を棒の様にして家に帰ると毎日の様に、今日も家を明けると請求せられたと家人に云はれる。この時ほど淋しい泣き度くなる様な氣持になつた事はなかつた。これほど町

らである。遭ひたくてあひたくてたまらない方を知らないからである。然し靜かに耳をそばだてよ、こちらに知る智慧もなく、聞く耳もなきを、かねて知り尽しうなづき續けて、常に私を離れ給はず、私に成りきつて、萬劫ゆるぎなき道を俱にし、西方の淨刹を指して、微笑をよせ私の手をとつてゐられるよき人聖人がゐられるではないか。

好人、淺原才市翁が「さいちはええ如来さんに遭はせてもらひました」と云ひ、或る方の父親は、その手に常に「阿彌陀さんに親しくなれ」と訓されたと云ふ。親しき如来さまに、ええ如来さまに遭はせて頂くことは、そのまゝ、「よき人の仰かうぶる」ことである。

あゝええ如来様にあはせて貰ひましたと、苦しいけれど苦しくない、淋しいけれど淋しくない心の重りをつけて下さる御念佛こそ、まことに私のいのちの親なのである。

「今生夢のうちのちぎりをしるべとして来世さとの前のえにしを結ばんとなり、我おくれなば人に導びかれ、われさきだたばひとを導びきて、生々に善友となりて互に佛道を修せしめ、世々に知識となりて永く迷執を断たん」

前の世も、今の世も、また来む世も、世々生々に善き友となり、よき師匠となつて、共に私やあなたや、その外縁ある人々を次から次へと導びきに導びいてやみ給はぬよき人、それが聖人であります。

故・清水清吉

中に家が沢山あるけれども、一体己れの住む家が無いのかと、引越しの苦勞したためし無い自分にとつては不覺の涙が知らず知らずのうちに頬に伝つてゐた。

さうだ私の住むべき安らへる場所は、唯如来のお胸の中よりほかになかつたのだ。いついかなる時でもここ許りは変りがないのだと味ははされたとき、勿体ない有難さの涙に交つて居た。

昭 一二、七月

毎朝四時半の起床に時々寢坊するので、何とかうまい工夫はないものかと腕時計を二十分ばかり進まして置いた。何ぞはからん朝になつてその進ました分を差引いて考へるので、むしろ前より成績が悪かつた。

私は罪惡深重の凡夫であると実感もせず、自分の針をグツト進ましておくもんだから、何かしら問題がおきると妙な事になり、正確な時間が判らなくなる。そしてとんでもない結果がもたらされる。

昭 一二、七月

さる友と久方振りに逢うた。その友は複雑な家庭の眞只中にあり、然も経済的にも種々な問題に直面してゐるので、私の顔を見るや否や色々と心中の悩みを打ち明けて曰く「到底どうにもならぬ。すつかり行き詰つて身動き一つ出来ずに悩んでゐる」。ほんとうに御氣の毒に堪えぬ事だと思つた。然し私の目にはまだ余裕が充分あると思つたので、「君は行き詰つたとは云ふものの私から見れば余裕綽々たるものがあると思ふ」と云ふと「いや君は私のほんとうの苦しさを知らぬからそんな事を云ふのだ。實際行き詰つて居るのだ」「いやそうじゃない、君はまだまだ余裕のある立派な証拠がある」と云ふと、

「何証拠があるつて、どんな証拠だ」「それは君がまだ佛の教をきかぬことが立派な証拠でないか。行き詰つた、行き詰つたと云ひながらも、たかの知れた頭でひねくりまはし愚痴を云ひながらも、とにかくのたうち廻つて生活し得て居るではないか。眞実に行き詰つたものなら何故佛様の御教を聞かぬのだ。み教をきかずに生きられるところは立派に余裕のあることを証拠だてて居るのじゃないか」と言つたら「君からそう云はれて見ると眞実それに違ひない、そうだそうだ、大いに御教を聞かう」と云うて明るい顔になつた。

私は何とした有難いことだらうと思つた。明るい氣持になつた友も嬉しそうだが、自分としてはそれ以上に嬉しさを味つた。

昭 一三、二月

た。私の様なものでも常に如来の眞実を聞かされて居るときに、偽物が出るたびに餘りにもハッキリと私の醜さが見えて来る。親鸞様が「眞実を顕はす」と一生懸命に叫んで下さつた御心が少しでも味は、して頂けた。

人は各々の境遇を土台として批判するものだ。ある人は珍しい青物のほしりを途方もない値で買つて美味しいと云ふ。だが、その日暮らしの人がそれを見て、何がそんなに美味いものか、たかが青物ではないか、少し日がたてばどんなにも安く買へるではないか、勿体ないと云ふ。そう言うて居りながらも、自分の財布から樂に買へるほしりの青物なら美味しいと云うて高価で買つて風味して喜んでゐるが、自分の手の及ばぬ値段のものを他人が買つたとすると、なんだあんなものにそれだけの金を出して一体それで美味しく喰へるか知らん、と批判する。實際人間つて勝手なものだ。

昭 一四、五月

去る未亡人の方で勇敢に家業を営まれ、多くの人々を使つて居らるる方に逢ふ。泌々と涙をこぼされて御述べなさるるに「私は女手一つで稼業をやつて行く上に於て、男の手を借らなければならず、今迄に沢山の人を替り替り使ひましたが、来る人々は皆良い人であるが、女の弱みから餘りにいたはり過ぎるせいか、その人をつけあがらせ、其の結果、商品を良い加減にする様にさしてしまひ、種々な事件が出来ると、遂

或る方が、どうも私の身の近くに軌道をはづして生活し、ひねくれる一方の歩みを續けて居る者がありますが、どうしたら良いんでせうと御相談をかけられた。私はその方をなほして上げようとするよりも、まづあなた自身の信念を養ひ、その上にその方のよかれと念するままに行動をとる外に道があるまいとお答へした。威圧して失敗するもあり、腫れ物に觸る様に大切に失敗する例もある。矢張り自分自身の信念を確立してゐたるのが根本問題だと思つた。

昭 十四、七月

さる日骨董屋さんと語る。その方は普通のさうした商売をして居る方々と違つて、一見識をもつて居られ、語られる一つ一つが非常に含蓄のあるお話で、仲々愉快であつた。

その人の云はれるに、「物の眞偽がどうしても判断のつかぬ時は、まづその物を一生懸命毎日眺めて居て、さて一たん箱か何かに入れて置き、何日目かに取り出して見て、なほ倦きが来なかつたら大抵眞物である」と申された。

昭 一六、八月

さる方が見えられて云はるるには、昔兩替屋の弟子を教育するには、偽金を見せる事はせず、唯眞物ばかりを常に見せて教育したものだ。

なるほど何でも無い様な話なれど、深いものを味は、され

ひその人をせめて苦しむで居ります。結局、私が良い人を連れて来ては悪人にして居る。その人をさうさせたのは私だと氣付かせて戴いた時、始めて心の安らかさを覺えますが、今後これからこうしたことを繰り返して、何人の人を悪くしてゆかねばならぬかを思ふ時、本當に堪らなくなり「何とした尊い御心境かと思はず頭が下つた。

昭和 一三、六月

私が常日頃愛誦して居る蓮月尼の歌
宿かさぬ人のつらさを情にて

おほろ月夜の花の下ふせ

といふのがある。私はややもすると人のつらさを情にうけるところをのみとつて、何としたらかく私の心にうけて行くことが出来やうかと、ついつつかりしておほろ月に照らされた花の景色にうつとりとする心境をさしおいてゐる。唯結果をのみねらひ度くなる私の浅はかさに泣く。

おほろ月に照らされた花の景色に接した歓喜から、自然に現われた「人のつらさを情に」うける心境ではありますまいか。ほんとうにいたらぬ私をして、今日様を迎へさして頂いた皆様方の御親切を、御親切と味は、さしていただくまでの大悲の御親切、ただその御廻向にほのほのと浸り申す事をせず、御喜びの御同行のみ眞似しやうとして疲れはてる我が身がうらめしい。

昭和、一〇、一一月

編集後記

自照舎の今田さんの話では、「自照舎の御佛像は源信僧都の御作である。僧都が佛像をお刻みになる時はこの佛像を拜む家は貧乏するやうにと願はれた」そうである。一道会館の御本尊も源信僧都の御作と称せられる。私は御佛前に坐らせて頂き乍ら「食乏せよ、食乏せよ」と仰せ下さる僧都の御心に触れて「世の住みろきはいいとらたよりなり」の横川の御法話を頂くことであります。

然し僧都は「小釈迦」とまで讃えられた智者でまします。だから名をさけて猿の棲む横川にまで隠遁されたのであるが、私如き愚鈍粗悪な者はその心配はいるまいと思つていたら、仲々愚鈍の身には愚鈍の身の名利がある。粗悪な者には粗悪な者の名利がつきまとうてやまぬ。あやふしあやふしである。

△「ありのままのわたくし」は古稀翁三瓶師の現在の御信境である。念佛の好伴翁の奥師に先だたれて、草庵に一人、佛と独り語りされる姿がチラツキ、我身を恥じ入る次第であります。特に最後の稿に玄風勸学の文を引用されたて、悪無碍の放従主義を叱つて下さいましたことは徳を正しめられます。

△「よき人の仰をかうぶりて」は法友禰原徳草師の、病む人々のために草せられた原稿であります。そのまま頂きました。師は禪家の人であります。不思議にも親鸞聖人に親炙せられて、京都嵐山の近くの古刹、淨住寺に

居られます。私の京都時代からの法友で、池山先生の御膝下に共によくお伺い申して法雨を蒙られた方でもあります。

△「随想断片」は清水凡禿居士の聞光録や不問語中の特に深く教えられる頁を抜き書きさせて頂きました。世にかくれた居土の短かくして長き御生涯の余徳に接し得られましたことを深く謝し奉ることであります。

△「超世の悲願」は私自身、人生に微塵の光のないことを自照せしめられると共に、世を超え給う悲願一つがいよいよ身に沁みること、その点を力説いたしました。

最近よく敗戦後の日本の道義がすたれた、この時に宗教家は眞に捨身の行をあらはしてほしいという声をききますが、それは宗教によつて現実生活をよくしやうとする宗教利用者の声であります。現実生活がうまく行けるのであれば超世の願は不用であります。敗戦による卑屈感と生活の窮迫の苦も、勝戦による慢心と不安の苦も、いずれも佛の御目にはあはれむべきものであります。そういう世間の虚偽さを徹底的に知らしめて下さつて超世の光明に包みとつて下さるのが佛教の根本であります。

筆者の御住所

島根縣瀬原郡井田村

京都市右京区山田開町淨住寺

三瓶徳英
禰原徳草

本紙によく御寄稿下さいます松村繁雄氏の御家も畑も長雨による山崩れで大損害をうけられ、誠に申し様のない御気毒さであります。

す。御住所は、

山口縣仁保局内仁保村であります。謹んで御知友に御報告申し上げます。

昭和二十六年八月十日 印刷

昭和二十六年八月十五日 発行

毎月一回十五日発行

定価 一部金拾五円(郵税共)
一年分金百八拾円(郵税共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集兼 花田正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八

一道会館

発行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

慈光第三卷第八号 昭和二十六年八月十五日発行(毎月一回十五日発行)

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可